



雨が降り残った朝 浅草駅で降りて橋吉の遊覧船乗り場に出ると隅田川が広がっていて広い川面を見ながら、さてどうしようかと考える。街の中を歩こうか、水辺を本でも見ながらゆっくり行こうか、ぼうぜんとかモメでも見ながら妄想の世界にひたって歩こうか。そんな両国の野暮まで三十分の歩きは、前の日にどこぞで飲んでママチャリを置いて帰ったため、たまにある。広い水辺をすがすがしく歩けるのだから言うことはない。

橋の上から引き舟が勢いよく水しぶきをあげて台船を引っ張り始めるのが見えた。水面のカモメの群れが一斉に飛び立って船をかすめて舞い上がり、空一杯に広がった。雨も上がりかけたようだ。まだ風は冷たいが上着のジッパーをしめて歩くことにした。

水辺の遊歩道を歩くと、次々と船が行き来する。遊覧船や小さなタンカー、ゴミの船 清浄船 長く連なったイカダや屋敷船たちなど見ていてあきない。カモメやカワウもそれぞれにあわただしく、そんな中をのんびり歩くのは遊んでいるようで、世の中のいそがしい方々に申し訳ない気もちょっとするが、まあ、これが一番安心なのだから仕方ないのだ。

それにしても最近 気持ちよく飲める機会がへりつつあるな。「今日は飲んでよかった。」と思うのは、何も、同じ考えを持ってみんなでほめあった時ばかりがよいのではなく、気持ちよく飲めるのは、意見や考え方は異なっても、お互いに腹の探り合いをすることもなく、小気味よく突つきあい、互いの穏やかで冷静な分析眼のもとで的確なやり取り、かけひきができる時だと思っている。杯を重ねながら、その話しかもっと深まり、興に乗っては広く世界を飛び回り、ぽっと出た軽口に鋭く温かみのある突込みが絡み、その突込みからまた世界が広がってゆくというようなのが好きなんだが、そうでないときも多くなってきた。

うまい酒かどうかは、まあ、どーでもいのだ。一番困るのは、酒の場を仕切る人が出てくることで、そうなる、穏やかに楽しく話しているかに見せかけて、結局その人の考えている通りに話を進めていって、その人の考えているとおりのおちつきかたや仲良しムードに行かなければいけないことで、会議をしているわけではないのだから、実につまらない。それでもうまい人はそれと知られずにやるのだろうけれども、普通は見え見えにわかるもので、まあ、困ったものだ。

それと、何の興味も中身もなく顔つなぎにただ笑って話を交わすのも、口が話しているばかりで、頭は何も動いておらず、あとから、「あの時間は何だったんだろう。」と思ってしまう。

まあそんなえらそうなことを書いているが、この間は友人がもう一人の友人に「私達のつきあい方は落語の話みたいで、二人で酒尊の天秤棒を担いで歩いてるようなもんです。」とのたまった。前の担ぎ手が、担いだ酒尊の重みで疲れて、後ろの担ぎ手に「2文持ってるから、ちょい一杯飲ましてあげてくれねーかい。」と金を払って担いでいた酒を飲み、しばらく行くと今度は後ろの担ぎ手が疲れて「どーいうわけか、丁度2文あるから……」と今度は前の担ぎ手に金を払って酒を飲み、前の男は「気がつくともた2文持っているから、また……。」というしあわせな状態なんだとおおらかな意見を述べた。実に、説得力のある意見であった。

そういやあ、むかし千住のジイサンとワンカップの酒を交互に必ず半分は残すようにと言い交わして電車の中で回し飲みをした事があるが、まあ、あちらは数学の先生なもんだから、すぐにそれは無限に続き、絶対になくなると気付いてにやりとした。まあ、くりかえして最後には「そんなもん半分残せるか！」と怒ったが、そんな話をしたら、もう一人の友人は「半分飲んだら、そこに水を入れてもとの量に戻しておけばいい。」という。そうすれば絶対に半分残す事ができる。「そーか、薄くはなってもいつまでたっても酒であることに違いはない。そりゃーいい。」ともう一人が喜ぶ。まあ、この程度の高尚な話をしつつ、今夜もすぎでいく。やっぱり日本は平和だし、われわれはアホなのだと思改めて思って今月も過ぎてゆきます。